

## 令和元年度 奈良市立辰市こども園 研究実践概要

園長名 辻 久代  
全園児数 171名

1. 研究主題 「心動かし、意欲をもって生活する子どもを目指して」  
～聞くことの大切さ・楽しさが感じられるために～
  2. 研究年度 初年度
  3. 研究主題設定理由
    - ・子ども達が、安心・安全な環境の中で「もっと遊びたい」「楽しい」「明日も続きがしたいな」と心から思える園庭、また保育者にとっても魅力ある園庭になるような環境の工夫をしながら、心動かし、意欲をもって生活する子どもの育成を目指した。また、自己主張はするが相手の思いを聞き入れにくいという子どもの実態から聞くことの大切さや楽しさが感じられるような力を育んでいきたいと考えた。
  4. 具体的な研究内容
    - ①研究のねらい
      - ・子ども達が、自ら環境にかかわり、遊んだり試したり工夫したりするような園庭にするための保育者の援助や工夫の在り方を探り、意欲をもって生活する子どもを育てる。
    - ②研究の重点
      - ・研究主題について、職員間で共通理解を図り、教育課程や指導計画に基づきながら研究を深める。
      - ・開園初年度である本園では、園庭の環境に着目して子どもが安心・安全に遊べる環境の工夫に重点を置いた。
      - ・子ども達が、一年間を通して試したり、友だちと一緒に遊びを進めたりすることができる環境構成や保育者の援助の在り方を探る。
    - ③活動の方法
      - 0～2歳児 <園庭の環境を整える>
      - ・乳児が落ち着いて遊べるように、園庭をプランターなどで区切り、遊びのスペースを作った。前期は、砂遊びを中心に遊び、少しずつ環境に慣れるようにし、遊具の使い方等も知らせてきた。後期、子ども達の動きが活発になってきたので、固定遊具の他にも、タイヤで山を作ったり、トンネルを出したり、平均台、巧技台などを、組み合わせたり、フープやボールなどを使って体を存分に動かして遊べるようにした。
- 【反省・評価】
- ・園庭で、1.2歳児が遊ぶ中で自然に関わることができ、1歳児は2歳児を真似て遊んだり、2歳児は1歳児に優しく接したりしていた。3学期からは、0歳児の子ども達も園庭に出る機会が増え、1.2歳児が側で見守ったり、一緒に手を繋いだりす

る姿も見られた。

来年度は、砂場の環境整備を行ったり、自然物を使った遊びを充実させたりして子ども達が「もっと遊びたい」「楽しい」と、思えるような園庭づくりをしていきたい。

### 3 歳児 『先生、遊ぼう』5月～2月

ねらい ○自分のしたい遊びを見つけて安心して遊ぶ。

4月新園舎になり、子ども達は、園庭を見て「早く、外で遊びたい」と楽しみにしていた。外に出ると築山に登ったり、広い園庭を喜んで走ったりする子がいる一方で、初めての集団生活で、なかなか遊びが見つけれず、様子を見ているだけの子もいた。

そこで、子ども一人一人が安心して遊べるには、環境をどのように工夫すれば良いかを考え保育室前に、3歳児の遊ぶスペースを作ることにした。プランターを利用して区切りをつけ、小さめの砂場を作り、砂場の用具を持ってきたり、近くにハウスや、テーブル、椅子などを並べたりした。また、保育者が自分から遊びに入りにくい子どもの近くに行き笑顔で寄り添い「一緒に砂場であそぼう」と声をかけ一緒に型抜きをしたり、傍に寄り添い一緒に楽しく遊ぶことを大切にしたりしてきた。すると「先生、一緒に遊ぼう」と自ら声をかけられるようになってきた。保育者と一緒に遊んでいる姿を見て周りの子どもも「何してるの?」と声をかけ、保育者を介して一緒に遊ぶ機会も増えてきた。



二学期に入ると友達や保育者のしていることに興味を持ち真似をしたり一緒に遊んだりするようになり自ら遊ぼうとする姿が見られるようになった。また、4歳児がしている遊びに興味を持つ姿が見られ、同じような用具をそろえ遊べるようにした。保育者も子どもの中に入り必要に応じて言葉をかけながら一緒に遊ぶ楽しさを繰り返し伝えるようにした。

三学期になると自分のしたい遊びをしたり、気の合う友達を誘い一緒に遊んだりする姿が見られるようになってきた。「今日は○○ちゃんと○○して遊んで楽しかったな」と笑顔で言ったり園庭の写真を見ながら、「今日は、ここで遊んだよ」と嬉しそうに伝えたり話したりする姿が見られるようになった。

#### 【反省・評価】

靴を履くと目の前で遊べる場の確保をしようと、広い園庭を区切り、保育室の前のスペースで、落ち着いて遊べる3歳児用の園庭作りに取り組んだ。また、子どもの気持ちに寄り添い一人一人丁寧に関わって繰り返し遊ぶことを大切にしてきた。そのことで安心して自分のしたい遊びを見つけ、遊べるようになったと考える。

子ども一人一人の成長や発達の段階を見極め、環境を整えたり、保育者が子どもの気持ちに寄り添って関わったりする事が大切であると感じた。

### 4 歳児 『もっとむずかしくしたい』(11月)

(ねらい) ○友達と一緒に遊びを進めようとする。

体を動かすことが好きな子どもが多く、運動会では走ったり、ダンスをしたり、生き生きと取り組む姿があった。園庭にあるタイヤや平均台で遊ぶ姿が見られたので、翌日、巧技台やフープ等があることを提案し、子どもと一緒に倉庫に取りに行った。それらを組み合わせて「スタートはここにしよう」「ゴールはどうする?」とコース作りを楽しんでいた。この遊びをもっと深めてほしいと考え、子どもの目に付きやすい場所にブルー

シートで簡易の用具置き場を用意した。日に日にコースが複雑になり、友達と一緒に遊びを進めようとする姿が見られた。さらに、はしごやハードルなど、用具も豊富に準備した。すると、翌朝園庭に出ると、「一緒に運ぼう」「どこにおく」と友達と誘い合って用具を運ぶ姿が見られた。遊びの振り返りの中で、「もっと難しくしたい」という意見が出て、どうしたらいいか、みんなで話し合う場をもった。巧技台を高く積み、玉入れに玉が入ったら次に進むことができる、迷路をつくりたい、などのアイデアが出て、日に日にコースが複雑になり、友だちと一緒に遊びを進めようとする姿が見られた。



### 【反省・評価】

○子どもの目につきやすいところに用具置き場をつくったことで、子どもたちの心を動かし「してみたい」という意欲に繋がった。また、日に日に工夫する姿も見られ、遊びの継続に繋がった。色々な用具を豊富に準備したことで、ちょっと難しいコース作りに挑戦する面白さを感じることができたと思う。

○遊びの振り返りをもつことは、遊びの確認や共有する時間となり、子どもたちの豊かな発想で面白いアイデアを出し合う貴重な時間となった。子どもが何に面白さを感じているのか見極め、繰り返し継続して取り組めるように環境を工夫する大切さを感じた。

### 5歳児 『いいね！やってみよう』

(ねらい) ○目的に合った素材や用具を選び考えたり試したりしながら友達と一緒に遊びを進める。

それぞれの時季や、子どもの遊ぶ姿、また、成長発達や保育者が育てたい力を見極めながら用具や材料を準備した。トイを使ったウォーターライダー作りでは、子ども達がすぐに遊び始められるように、砂場横のスペースに様々な長さ、形状のトイや、ビールケース等を用意した。初めはまっすぐのコース作りから、「もっと速く水を流したい！」と考え、ビールケースを置き、傾斜をつけることで、速く流れることに気づいた。「もっと高くしよう。」と、ビールケースの個数を工夫しながら楽しむ姿がみられた。

秋には、集めたどんぐり等を使い、すべり台と砂場の間のスペースを使いどんぐり転がしのコース作りを楽しんだ。繰り返し遊ぶ中で、どんぐりの大きさや重さなどの特性に気づき、どんぐりの種類によって転がる速さの違いがあることにも着目するようになった。その中で、「もっと高い所から転がしたらどうなる？」と、すべり台の高さから転がすことを思い付き、すべり台もコース作りに入れながら、広いスペースを使い、ダイナミックなコース作りを始めた。途中、トイが外れたり、滑ったりしてうまくコースが繋がらなかったが、遊びの後の話し合いで、洗濯ばさみや、滑り止めマットなどを用意することや、たくさんのどんぐりをすべり台の上に安全に運ぶために、牛乳パックやすずらんテープを使ってすべり台に取り付け、紐を引っ張り上に運ぶ装置を作ったりすることを話し合った。友だちの意見を聞いたり、賛同したりまた一緒に考えたりする姿があった。



## 【反省・評価】

新園舎となり、園庭も大幅に広くなり、子ども一人一人が存分に身体を動かし、のびのびと遊べる環境となった。そこで、子どもが意欲的に遊べる園庭づくりを考えるとともに、乳児の保育者と話し合い、幼児、乳児の遊ぶ場所を分け、それぞれの遊びを保障し、充実できるよう努めた。

子ども達が、ウォータースライダー遊びでコースを考えたり、工夫し遊びを存分に楽しんだりした経験が、どんぐり転がしの遊びにつながった。子ども達の遊ぶ姿を見ながら、水道からの導線や、トイや、ビールケース等の用具や素材を置く場所を工夫した。どんぐり転がしをすべり台横にしたことで、園庭の遊具も取り込んだ、ダイナミックなコース作りへと発展した。保育者が目の前の子どもの遊びの姿から、より子どもが楽しさを感じられるような援助やかかわりを考慮し、実践に移せるように環境を整えることが大切であると考えている。

## 5. 研究の成果

- ・開園初年度で、保育室・園庭等の環境構成や使い方について、子どもが安心して落ち着いて過ごせる場であることや、居心地の良い場所作り、自分の好きな遊びを見つけて遊べる環境とはどのようなものなのかということを保育者間で何度も話し合ったことで、子どもたちが自ら環境にかかわり安心して楽しんで遊ぶ姿につながったと思われる。
- ・保育者との信頼関係を基盤に、情緒の安定を図り、それぞれの年齢に応じた環境を構成し、見直し、再構成を繰り返ししてきたことが、「楽しいな」「もっとやってみたい」と子どもたちの心を動かし、さらなる意欲や自信となっていくと感じた。
- ・友だちに自分の思いを伝えたり相手の思いを聞いたりすることで遊びのイメージを共有し、友達同士かかわって遊べるようになっていくと思われる。また、そのことを保育者は根底に持ち、意識しながらかかわることが大切であると考えている。

## 6. 今後の課題

- ・乳児期に、保育者との信頼関係を基に、自尊感情を養い育んでいくと思われる。「自分は大切にされている」と満たされ、周りの環境や友達にも目を向け視野が広がっていく。今後もこの根底にある力を大切にしながら、幼児期につなげていけるような援助をしていきたい。
- ・今年度の反省評価をもとに、長期的に造っていく自然環境や、子どもの成長発達段階に応じた環境や援助の工夫について探していきたい。